

あなたは、「母性本能説」？ 「母性学習論」？

当HPで以前に、書籍：「明日へ、ひょうひょう」の読後感「母親の心情経過分析のユニークな障害児子育ての本（「雑学BN」の書籍等読後感関係（Ⅰ）P、2004. 8.13. 「母親の心情経過分析のユニークな障害児子育ての本」：参照）」を記載したことがある。

その著者の「はじめてダンス！－重度障害者の娘と共育ち－」が出版されたことを、2、3度メール交換したことのある娘さんのHP（「雑学BN」のリンク関係（Ⅲ）P、「CONVEY」リンク：参照）で知り、早速購読した。

前著で「一心同体ではなく運命共同体である」と娘に宣言する母親である通り、今回も随所に母娘の生きようも紹介されていたが、重度の障害と難病を抱えながらも「身体表現」という舞台芸術活動に駆ける娘の「生きる勢い」から、母親という立場の一人の女性として「共育ち」した自らの生きよう（様）が主に描かれていた。

それにしても、4世代同居の大家族の嫁であり、障害のある娘の母親であり、40代で博士号を取得し今は各大学での講義、年に数回研究の取材、学会発表の海外旅行も怠りなく、今また50代にして娘に感化されて、ダンス教室の校長、等々、正に、自立した、たくましい女性とは、この人のことか……。

こうした自らの生きようからか、障害児・者の母子心中についても、著者なりに触れている。

著者によれば、「出産をして子どもを育てるという母性は理屈でなく本能として備わっているという、常識化した母性本能説と、私の考えは違う。

親子関係も時間をかけて紡ぎ出されるもので、母性とは、子どもとの共同生活から、時間をかけて自然に発生し醸しだされていく。

母性とは、学習されて初めて獲得する意識であり感情だ。私は母性学習論者である。」という。

そして、母性本能説という社会の、また自らの呪縛故に、母親たちは追い詰められているのではないかと推論し、現代社会の硬直した母親像からの脱却のための再検証と、再構築を提案している。

確かに、出産後直ぐに医師から「間もなく死ぬだろうから」と必要でない母乳を出なくする注射を打たれ、1歳の誕生までは神社に「ムスメが死にますように」と手を合わせていた著者が、現在、「娘と共育ち」して、一人の女性としても輝いている生きようからの言葉だけに、著者の云う母性学習論には説得力がある。

追伸：私は、コミュニケーションとは「紡ぎ合い」とも思うので、「紡ぎ」を字解にもつ漢字「『係』り合い」という表現をしています。

（2006年10月12日記）